

平成 18 年度 A 級修了研究レポート

「竹」で輝け子どもたち！

～「七夕のまち平塚」の音楽活動～

活動地域：神奈川県平塚市

専門分野：音楽教育・声楽

18A-0895

大屋 啓子

「竹」で輝け子どもたち！

～「七夕のまち平塚」の音楽活動～

18A-0895 大屋 啓子

本レポートは音楽指導員として地元平塚の伝統行事、「七夕まつり」の「竹」から生まれる平塚ならではの文化芸術のまち興し。祭りで使用済みの「竹」の再利用としての楽器制作、そしてその楽器の演奏技術の習得、アンサンブルの楽しみ(バンブーオーケストラ)、コラボレーションによる異文化交流。また「竹」から創作する子どもミュージカル講座について考察した。

第1章では平塚市の地域の特色、文化活動、公共施設、設備の現状とその課題について考えた。その結果平塚市では教育や文化の分野では、人間尊重を基本理念とした、心ふれあう人間性豊かな都市づくりを推進しているが、文化活動が盛んになると、公共施設の利用者が増え、利用回数の規制が出始め、まだまだ施設が不足している現状であった。

第2章では子どもの音楽活動のありかたについて、学校教育における音楽指導の現状や平塚市内の音楽活動団体の活動状況から、平塚市での子どもの音楽活動の企画運営可能な方向性が見えてきた。

第3章では「七夕のまち平塚」ならではの文化芸術のまち興し。七夕まつりで使用済みの竹を再利用し、竹の楽器制作や演奏による市民の新たな音楽文化の定着を目的とした音楽活動として、平成18年度文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業「竹」創造のまち平塚実行委員会を立ち上げた。地域のリーダーの育成、地域芸術団体の育成、シンポジウム等による発信交流の事業を企画した。

第4章では「竹」楽器、アンクルン、バンブーゴング、こきりこ、の制作の実際。七夕まつりでのアンクルンコンサートの実現とアンクルン演奏講座によるアンクルン演奏者の育成。そして小学生を中心に50名余りの子どもによる、創作ミュージカル講座の運営と公演について、子どもと共にミュージカルを作る喜びを実感するまでの過程と今後の展望について。

第5章では「国際音楽の日」(IMD)として、平塚市の子どもや地域の音楽活動の活性化をはかるために、「竹」と邦楽、洋楽、民族音楽のコラボレーションをテーマに平塚市民のより多くの参加を目指し平塚からの音楽の発信。また民族音楽の音楽活動による、外国との文化交流と親善について考察した。

「七夕のまち平塚」の音楽活動

「竹」で輝け子どもたち！

はじめに	1
第1章 平塚市の概要	3
第1節 地域の特徴	3
第2節 地域の文化活動	3
第3節 地域の公共施設、設備の現状とその課題	4
第2章 子どもの音楽活動のあり方	5
第1節 子どもと音楽の関わり	5
第2節 平塚市の青少年の現状	6
第3節 家庭教育の一環としての音楽活動	6
第4節 学校と社会の共生のなかでの音楽活動	7
第3章 「七夕のまち平塚」の音楽活動	8
第1節 平塚の特徴を活かした音楽活動	8
第2節 「竹」創造のまち平塚の立ち上げ(平成18年度)	8
第3節 「竹」創造のまち平塚の推進(平成19年度)	9
第4節 「竹」創造のまち平塚の今後の課題	10
第4章 音楽活動の実際	11
第1節 「竹」楽器制作	11
第2節 「竹」楽器演奏	11
第3節 ミュージカルの公演目指して	11
第4節 合唱する楽しみ。喜びを求めて	12
第5章 平塚から発信、交流	13
第1節 邦楽・洋楽・民族音楽で綴る「竹」物語	13
第2節 邦楽・洋楽・民族音楽で綴る「七夕」物語	15
第3節 音楽は世界の共通語	16
おわりに	17

はじめに

今年もみなとみらいホールでの紀声会コンサート^{注1)}が終わった。私が今まで、様々な音楽活動を前向きに取り組んできた源の1つはこの活動にある。私が高校2年より師事している声楽家岩崎由紀子先生の門下生のこの会は、現役の音大生、プロの声楽家、音大卒業後声楽と真剣に向き合い勉強したい人で構成されている。今、この時を全力で声楽と向き合って挑戦している人の集まりである。私はこの会に所属して30年が経過した。私の家族の状況の変化にともないレッスンに行けない時、コンサートに出演できない時もあった。しかし今年30回記念コンサートに出演しこの30年間を振り返り、音楽表現の奥の深さ、魅力、そして人間の知識や理屈を超えた、音を通して人間の精神の最高に輝く美しさ(音楽の魂)を改めて実感した。私が音楽で子どもたちに関わりたかったのは、大学在学中に音楽教育講座で「才能教育」について鈴木鎮一先生の講義を受けたときからである。「音楽は高い感覚・美しい心を育む。そして、だれもが、音楽を通して、生の喜びを感じ、あたたかい人間性を養うことができるようになる。どの子どもも育て方ひとつ」の愛を基調とした教育法。そして音楽とは、芸術とは何かというテーマを抱えドイツへわたり、アインシュタインから宇宙と人の理を学びとり、師匠クリングラーの演奏によりモーツァルトの魂を感じ取り、高い知性と愛に触れ、芸術とは自分の日常にある人格・感覚・能力そのすべての表現にあると悟り鈴木先生は教育者になった。この音楽教育に私は感動したからである。

今の社会は、物質的にもものがあふれ何不自由なく暮らせるが、その反面何でも簡単に苦労する事なく欲求が満たされた日々を過ごす子どもが増えている。夢や希望を持って目標に向かって努力し、生き生きと目を輝かせて活動する子どもの姿を目にするのは身近な所ではスポーツの分野が多い。子どもが自ら活動に参加し、努力を積み重ね、目標に到達した時、達成感や、やり遂げた喜びを味わうことができる。そして自らの経験によって得る感動は子どもの感性を育てる。これから未来に向かって生きる子どもにとって、感性や人間性を育てるうえでも、子どもが目目を輝かせて参加できる音楽活動が必要である。そしてその活動に関わる指導者、運営スタッフ、子ども達が音楽活動を通して世代間交流をし、子どもの社会性を育てる。それは、市民のモラルの向上にも役立ち、ひいては音楽のまちづくりにつながる。

相対性理論の「アインシュタインの数式の比類なき美しさ」も彼の純粋な音楽的才能が生む構図の美しさだと言われている。そして、彼は「運動体の光学」を直感で気づいた。この直感の原動力は音楽だと述べている。人類は、ことばと文字という文化を創造すると同時に、音楽という素晴らしい文化を創った。ことばや文字を超えた生きた芸術である。そこには音楽の与える感動があり、私たちを癒し、高め、喜びと感動を与えてくれる。^{注2)}

現在の子どもと学校の関わり方も問題があると思う。なぜなら、テストで人間評価をし、みんなが成績ばかりを気にしてしまう。1つでも良い、それぞれの子にしっかりとした能力を身につけさせ、1つぐらいい立派な能力をどの子どもにも育ててあげられるはずである。今日の教育の中に行動と心とを育てるための教育が、日常生活においてなされたら、どんなに楽しい社会を作ることができるかと思う。しかし、今日の教育は、ただ教えるのみで、エゴイストに育ててしまっている。そこで私は教える教育から育てる教育に方向転換し、音楽指導を通して青少年の育成に関わりたいと思う。

幼児期の子どもの育て方次第で、どんなに素晴らしい育ち方をするか。幼児期は人間形成の決定的な時期であり、青少年の育成にあたっては、幼児期は児童期の育成の上に青少年の育成があり、小さい頃からの繰り返し、積み重ね、そして適した環境を周りの大人が作り育てることの重要性を感じる。

子ども教育は、絵画や音楽など芸術から出発すべきである。なぜなら、芸術は子どもの心身を根こそぎ動員させるからである。そして、そのことによって子どもは、行動への意志を目覚めさせられるからである。絵画と音楽には対極的な働きがある。絵画は固定し静止したものを再び生き返らせ、動かす力になるのであるが、音楽は活発に動いているものを沈静させ、安らがせたり癒したりする。耳で聞く音は、まだ形になっていないものを体験させる。まだ形になっていないものの世界が音楽である。だから音楽は、この見える世界にはまだ存在していないものを、新たに創造する可能性を人間に与えてくれるのである。

第1章 平塚市の概要

第1節 地域の特徴

平塚市は神奈川県ほぼ中央南部に位置する商・工・農業の均衡のとれた首都50km圏にあたる複合都市である。都市施設や市街地の整備を進めるとともに、産業の発展に努め、平成13年4月には特例市に移行して25万市民を擁する湘南の中核都市として成長し、平成14年4月に市制施行70周年を迎えた。

以下、特に平塚市の教育方針について述べる。21世紀を迎え、市民との協働のもとに、改訂基本計画に掲げた「潮風と花のかおる湘南ひらつかまちづくり」を進めている。教育や文化の分野では、展望する都市のすがたについて「豊かな人間性と文化を育む魅力ある湘南の都市」を基本目標に定め、人間尊重を基本理念とした、心ふれあう人間性豊かな都市づくりを推進している。

これからの社会の情報化・国際化とともに少子高齢化に向かって確実に進行していくなかで、平塚市の教育行政は、市民の新たな学習意欲の高まりと多様な学習ニーズに対応するために、生涯学習環境の整備を進めるとともに個人の尊重を重んじる豊かな人間性と文化を育むための諸施策を、学校・家庭・地域社会の連携をさらに深めるなかでの推進を表明している。

社会教育にあっては、市民の多様な学習ニーズに応じた学習環境の整備を図るとともに、本市の埋もれた歴史的文化遺産を発掘し、次の世代への継承に努めるとともに、市民を中心に据えた活動の向上を図り、連帯感のある魅力と活力に満ちた地域社会の形成を目指している。

第2節 地域の文化活動

平塚市では平塚市長を理事長とする財団法人平塚市文化財団が各種文化事業の企画および実施を行っている。その際財団に企画専門委員会を置いて財団が行う各種文化事業の企画および実施について専門的な見地から検討し理事長に報告している。その専門委員会は専門的な知識を有するもの、各種団体の代表者などから理事長が20名以内委嘱している。

平塚市文化財団は主に3分野の事業を展開している。

(1) 市民文化の創造と育成

ジャンルごとに平塚市民で構成される実行委員会またはそれに準ずる組織と財団による運営で毎年恒例の行事となっている。主な行事を挙げると以下のようになる。ジャズ(軽音楽フェスティバル2月)、演劇吹奏楽(演劇フェスティバル9月2日間、吹奏楽フェスティバル5月)、合唱(市民合唱祭3月)、第九(第九のつどい12月)

(2) 市民文化の普及および振興

ポピュラー(ジャズ)、クラシック(声楽)のジャンルで毎年その分野の平塚で(専門家や指導者の)定まった人に丸投げされ、今年で12年目を迎えようとしている。

(3) 芸術文化の鑑賞機会の提供

第3節 地域の公共施設、設備の現状とその課題

平塚市には総合公園(総合体育館)、馬入ふれあい公園(ひらつかアリーナ)、市民センター(大ホール定員1400名、大会議室、小会議室)、中央公民館(大ホール定員700名、小ホール、工作室、会議室、音楽室、リハーサル室)、市内公民館は4ブロック25館、青少年会館(集会室、音楽室、武道場、和室、学習室)、教育会館(ホール、会議室)、勤労会館などがある。

教育会館、勤労会館以外は事前に団体登録(登録には市の審査がある)するシステムで施設を利用している。市民センター大ホール、中央公民館大ホールは営利を目的の利用もできる。公共の施設の大半は1~2ヶ月前の申し込みで決められた日に抽選や話し合いをし、調整して運営されている。会場使用料は体育館、大ホール(市民センター、中央公民館)以外の施設は無料。会場使用料が無料で設備が良いため利用団体が増え続け、利用回数の規制が出始め、定期的な利用が難しくなっている。市内の小、中学校の空き教室の一般開放なども行われているが、まだまだ施設が不足している。また市民センター大ホール、中央公民館大ホールは1年前の利用予約受付のため、平塚市文化財団や中央公民館の関連の行事、定期利用団体でほとんどふさがっている。4月に国の助成事業の申請が通り、ホールを押さえようとしてもホールが空いていないのが現実である。

第2章 子どもの音楽活動のあり方

第1節 子どもと音楽の関わり

私たちの周りは、多くの音で満ちている。それを私たちは何気なく聞き過ごしている。しかしその音は時として意味のある音になる。たとえば食器の触れ合う音や水のほとばしる音は、母親が食事の支度をしている音であり、食事の団欒や母親の思い出を呼び起こす意味のある音になる。また特別に意味のある音楽、母の歌ってくれた子守唄や、幼い頃の非常に楽しかった幼稚園での行事の音楽、あるいは悲しみに出会ったとき、挫折したとき励まされた歌など、様々な体験に結びつけられて、私たちの記憶の底に沈んでいる。それが何らかの機会にその音楽を耳にするならば、私たちの心の中にはすぐにそのときに持った様々な感情が甦る。それに関連した様々な過去の体験が思い出されて、新たな感情がわき、未来へと向かう心をかきたてる。^{注3)}

子どもの教育をめぐる議論が、近来とみに盛んになっている。学校週5日制や「ゆとりの教育」、新しく導入された「総合的な学習の時間」に対して「学力低下」という批判も加えられている。子どもの教育は学校の中だけに限定されるものではなく、多くの大人が関わり、そして育てていく事こそ教育の必要条件ではないだろうか。そのために、家庭、地域、学校が協力・連携していく協働の形が求められている。

異なった立場の人、異なった立場の組織などがパートナーシップを発揮し、共通の目的を目指してともに行動すること、そしてお互いに得るものがある。このような考えのもと、私は平塚市ならではの青少年の音楽活動を考えて見ることにした。

地域と学校がそれぞれ教育力を持ち、お互いに自立した存在であることが必要である。そうでなければ、地域と学校が依存、もたれあいの関係に陥り、ひどい場合には責任の押し付け合いになってしまう危険性すらできてしまう。地域と学校がお互いの責任を確認し、引き受けるべきものは引き受け、任せるものは任せるなかで、地域の教育力と学校の教育力の関係を作り上げる必要がある。私はここで、生涯学習音楽指導員として平塚の地域教育力の担い手として、青少年の現状を把握したうえで青少年の音楽活動に取り組むことにした。

近年、いくつかの点で学校教育のあり方に大きな転換が生じている。1つは、自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」、すなわち聞き、話し、読み、書き、議論し、判断し、実践する能力が重視され始めたことである。今まで、学校では与えられた知識を理解することに重点が置かれていたが、「総合的な学習の時間」の導入などにより、児童・生徒自らが課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力を身につけることが重視されるようになった。この転換に対しては「学力低下」という観点からの批判も展開されているが、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」との間でバランスをとった学校教育の必要性が感じられる。

もう1つの大きな転換は学校か地域に開かれた存在となり、地域との関係を求めつつあることだ。今は、学校か地域とのつながりを求め、保護者・地域の人々との協働を通して地域に密着した学校になる事を目指している時代である。音楽指導員としてこの機運を大切に、地域の学校、児童生徒の現状を把握し、地域のニーズにあった、抽象的な知識ではなく具体的な知恵を学ぶこと、1つの正解を求めるのではなく多様な出会いを獲得することが大切だと思う。また、そこでは評価されることではなく承認されること、間接的体験ではなく直接的体験が重要である。

第2節 平塚市の青少年の現状

平塚市では不登校、集団不適応の子どもが年々増え、内容も複雑化、重度化している。青少年を対象とした音楽活動に特別な教育的配慮を必要とする子どもとその家族は、その子どもの持っている可能性を伸ばすための適切な教育の場として参加を希望してくる。一般の青少年と同じ土俵で参加するためには、企画・運営、指導者、一般の参加者の理解、援助のもと、参加者の保護者との連携によって初めて参加が可能になる。

また平塚市の障害児教育は昭和24年から始まり、昭和54年の養護学校の義務制施行を契機にして各種障害児学級が整備された。学校や地域社会での交流の機会を積極的に設け、すべての子どもたちが共に学び共に育つ、そのような活動の1つにこの音楽活動も位置づけられる事が望ましい。しかし、いじめや不登校の多い現状で、さらに障害児とも向き合うためには、指導者はじめのスタッフおよび参加者全員の「暖かい心」と善意、感謝の気持ちが必要とされる。

歴史ある少年少女合唱団が衰退し、子どもたちが歌わなくなったといわれる。その反面ヤングミュージカルやカラオケに歌う喜び、快感を見出す青少年が多くなっている。核家族化が進み、生活様式が変わり個人主義の考え方や行動が定着し、本来の人間としての素朴な音楽表現である歌うこと、音を他人と重ねたり、はもらせるなどの表現を身近に感ずることが少なくなり、CD・MD、テレビなどを通して歌を聞き、その出されている音に対して何の疑問も持たず、自分の出す音に対しても無責任に発信していると思う。

「人類は、ことばと文字という文化を創造すると同時に、音楽という素晴らしい文化をつくった。それは言葉や文字をこえた生命のことば・・・そこに音楽の与える感動があるのです」^{注4)}といわれている音楽の感動を平塚の子どもたちと音楽活動を通して実践したいと思う。

第3節 家庭教育の一環としての音楽活動

育児において、母親の歌う子守唄は子どもを背負ったり、抱いたりしながら、背中優

しくトントンしながら眠らせるものだ。はだの触れ合いと優しい肉声こそ赤ん坊のところに響く子守唄である。母親の発する言葉の音楽的要素(音声・強さ・抑揚・テンポ)を手がかりに「あなたが好きですよ」というメッセージをうけとめるのである。^{注5)}

子育ての日常において、親は自分が音楽活動をしているとは思ってもよらないが、親子のやりとり自体を自然に楽しみ、わが子を喜ばせようと夢中になるとき、言葉は「音楽」になり、様々なバリエーションでうたわれる。スターンは、母子行動において、「発生、運動、顔の表情、触刺激、筋感覚刺激」などで繰り返しがよく使われることに注目し、「繰り返し行動」と名づけた。それは正確な繰り返しではなく、全行程の二分の一以上に「諸変化」が加えられる。つまり養育者の行動は、後続する提示のつど、音や運動に「主題や変化」を織り混ぜて作り出されるのである。

子育ての日常は、本来、親子の「音楽的やりとり」に満ちている。音感を育てるとか、技能を修得させるという意図とは無縁で、やりとりを心からたのしんでいるとき、その優しい肉声は音楽の原点に通じている。

第4節 学校と社会の共生のなかでの音楽活動

21世紀になり、自然界、生活環境、社会生活など限りなく不確かに感じられる時代になった。学問や芸術文化への価値観に大きな変化が見られる現在、少子化や週休2日の実施に伴い、子どもの課外活動のあり方が問われている。そんな中、平塚では社会教育と学校教育の間で、新たに学校と社会の共生の中での活動が始められている。

一例を挙げると毎年恒例の「第九のつどい」では参加者の高年齢化に伴い、若手の育成や今後の存続のために、小学生、中学生の参加には様々な便宜をはかり、参加しやすい環境を作っている。中学校の授業の一貫で参加したいという申し出が、学校側から主催者側(平塚市文化財団、平塚第九実行委員会)にあるとその学校に、合唱指導者を派遣し、本体の合唱団の練習と平行して指導し部分的に本体と合流させ本番に導いている。「第九のつどい」では200名以上の合唱参加者、4名のソリスト、100名あまりのオーケストラの奏者が指揮者のもと1つになつての音楽活動である。このスケールから生まれる感動ははかりしれない。そして音楽活動を通して音楽を伝えることの楽しさ、充実感を体験すると個々の音楽に対する概念が変わり、あらたな音楽活動への意欲がわいてくる。学校と社会が連携により、着実に音楽活動が推進している。学校を中心に考えると音楽活動は、学校という枠ではなく、広く社会教育、社会の中で総合的に活動することで水準の高い内容での実践教育が可能である。

第3章 「七夕のまち平塚」の音楽活動

第1節 平塚の特色を活かした音楽活動

平塚は昭和20年7月の大空襲で壊滅的打撃を受け、全市が焼け野原と化した。しかし復興は早く、昭和25年7月復興まつりが開催された。この時期が近隣農家の農閑期とも重なり非常に多くの人出をみた。そこで、平塚商工会議所、平塚商店街連合会が中心となって昭和26年7月には仙台の七夕まつりを範とし商人のたくましい心意気を吹き込んだ第1回七夕まつりを行った。昭和27年と28年には「平塚七夕音頭」、「紅屋町音頭」、「平塚恋しや」が発表され七夕まつりに色をそえた。昭和32年(第7回七夕まつり)から平塚市の主催となり、今日では、日本を代表する七夕まつりに成長した。

平成19年で56回の開催となるが、毎年七夕まつりのあと、まつりで使用済みの「竹」を利用して、竹馬、竹とんぼなどの遊具や竹工芸作品づくりが行われている。平成17年度「地域子ども教室推進事業」において「手作り楽器」の企画の際、この「竹」に着目し、「竹」楽器作りをしたことがきっかけとなり、「竹」と結びついた音楽活動を展開することとなった。

第2節 「竹」創造のまち平塚の立ち上げ

平塚で「竹」と結びついた音楽活動をするにあたり、平成18年度文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業として取り組めないかと平成18年1月に平塚市の文化行政推進室を通して申請をしたところ、申請が通り、同年5月平塚の七夕まつりの「竹」から生まれる平塚ならではの文化芸術のまち興し。「竹」の楽器や「竹」がらみの新たな音楽文化の定着を目的とし、子どもから高齢者まで、身近に音楽が楽しめる活気ある音楽のまちづくりを目指した「竹」創造のまち平塚の実行委員会を立ちあげた。

「文化芸術による創造のまち」支援事業の対象となる事業は(1)地域文化リーダーの育成(2)地域の芸術文化団体の育成、(3)シンポジウム等による発信・交流の3分野で地域の文化芸術活動の環境づくり、人材育成および子どもたちが参加する文化芸術活動の活性化に寄与する事業となっている。

- (1)地域文化リーダーの育成として、「竹」楽器アングルン、バンブーゴング、こきりこ竹の制作講座を地元の竹細工サークル「竹遊会」の会員、アングルン調律師の協力を得て実施した。
- (2)地域の芸術団体の育成 として、アングルン(インドネシアの民族楽器)演奏講座、こきりこ竹、こきりこさら演奏講座(こきりこ節)、青少年ミュージカル講座(竹取物語)を実施した。
- (2)地域の芸術団体の育成 として、前期(7月1日～10月1日)全25回、後期(1

0月14日～4月1日)全25回 合計50回実施前期参加者54名(小学生51名、高校生3名)、後期参加者51名(幼児3名、小学生48名)

ミュージカル「竹取物語」、10月1日、3月17日、4月1日公演

ミュージカル「アニー」よりハードロックライフ、4月1日公演

ミュージカル「キャッツ」よりスキンプルシャンクス、11月11日平塚商業高校文化祭出演

ミュージカル「コーラスライン」よりワン、11月11日、12月24日、4月1日出演

- (3)シンポジウム等による発信・交流として、「竹」をテーマに邦楽(箏、尺八)、洋楽(声楽、ピアノ、エレクトーン、フルート、トロンボーン、ホルン)、民族音楽(こきりこ竹、ささら、アンクルン)のコラボレーションによるコンサートを実施した。

邦楽・洋楽・民族音楽で綴る「竹」物語・・・2007年10月1日(日)平塚市民センター

100名あまりの出演者、1000人に及ぶ観客、嶋崎理事長の「国際音楽の日」の講話で始まった平塚での第1回目の「国際音楽の日シンポジウムコンサート」は好調なすべりだしで無事終了した。

生涯学習指導員による「ドリームコンサート」2008年3月17日(土)板橋文化会館小ホールにはミュージカル「竹取物語」に参加の子どもたちの30名あまりが遠征公演した。

おんがくっ子フェスティバル2007・・・2007年4月1日(日)平塚市中央公民館大ホール

平塚市内で音楽活動している子どもたちが(幼児～高校生)集まってアンクルン演奏、ミュージカル抜粋、ミュージカル「竹取物語」全曲、ミュージカル「白雪姫」、リトミック発表、ダンス発表などバラエティーに富んだ発表の場になった。

第3節 「竹」創造のまち平塚の推進

平成18年度の活動を継続、発展させるために、平成19年度文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業の継続申請をし、平成19年度も文化庁の支援を受けられることになった。平成18年度の活動の上に、より幅広く、専門的に深く、そして他の地域との交流もしながら多くの人の活動への参加を目標とし、18年度と同様に3分野での事業を計画した。

- (1)地域文化リーダーの育成として、「竹」楽器作りと楽器活用

「竹」楽器制作で作る楽器に種類を増やすことにより、その楽器を使用しアンサンプルする上でバンブーオーケストラへと発展させたいため、バンブーオーケストラの制作、演奏の専門であるアオイスタジオに指導を依頼することになった。また

「ケーナー」の制作、演奏の専門である奈良の井上暁先生の協力も得ることとなった。昨年度の指導者に今年度新たな指導者が加わり幅広い展開が期待できる。

(2) 地域の芸術団体の育成 平塚文化芸術青少年合唱団の育成

創作ミュージカル「七夕」を市内の小学生(定員50名)対象に企画、平塚の七夕まつりと結びつけ、平塚市民手作りの平塚の風土に根ざしたものにしたい。

今年は内モンゴルの民族音楽との交流もあり、世界の音楽、民族音楽と、国際色豊かな企画になった。音楽を通して国際理解、親善を目指す。

第4節 「竹」創造のまち平塚の今後の課題

「竹」創造のまち平塚実行委員会を立ち上げ、平成18年、平成19年と文化庁の助成事業として、平塚市文化行政推進室、平塚市文化財団との共催で運営している。昨年は実行委員会、平塚市の行政側共に初めての事業であり、手探り状態のうえに、平塚市側もこの事業の枠で予算が確保できず、やりくりしながらできる限りの協力をしてくれた。平成19年度は1年間の経験のうえに効率よく運営し、可能な限り音楽活動の質の向上を図りたい。また平塚市の市長、教育長共にこの活動の内容を理解し、積極的に関わって支援してくれるため、市民への呼びかけ、参加に期待ができる。しかし現在「竹」創造のまち平塚の運営は、総予算の大半を国の助成金でまかなっている。国からの助成がないと質の向上どころか、現在の事業の質や規模を維持することも難しい。今年1年運営する中で平塚市の行政側と相談しながら、次年度にこの活動を存続させる方向性を探りたい。

第4章 音楽活動の実際

第1節 「竹」楽器制作・・・アングルン、バンブーゴング、こきりこ竹 (資料1参照)

平成17年、18年と平塚の「七夕まつり」で使用済みの竹からアングルンやバンブーゴングが200個以上誕生している。アングルンは1音を奏でる楽器である。楽器制作には竹細工サークル「竹遊会」の十数名の方が指導にあたり、調律は毎年夏休みに青山の「子どもの城」でアングルン制作教室の指導にあっている吉田恒久さん(アングルン協会主宰)に調律指導をしてもらった。「竹」は湿度の変化に左右される楽器であり、良い状態に保つことに気配りが必要である。バンブーゴングは打楽器であり、左右長さの違う切り込みにより、2種類の高さの音を出し、幼児から大人まで幅広い年齢層に好まれる楽器である。こきりこ竹は直径1cm位の竹を7寸5分(約23cm)に切り2本1組で演奏する。

第2節 「竹」楽器演奏

- (1)アングルン演奏講座は9月より、月1回、全8回で実施した。アングルン奏者新谷たか枝さんを代表とするインダ・プトゥリ(田村照代、渡辺玲子)の3名が指導にあたり、月1回のレッスンで実施。幼児～大人までの20数名の参加があった。打楽器としてのリズム遊び(電車ごっこ)、メロディー奏(荒城の月、きらきら星)、コードで和音付け(ふるさと)、と楽器の特徴を活かし幅広い年齢層に対応した。
- (2)こきりこ竹の演奏講座は様々な場面で気軽に楽しく実施した。こきりこ竹の存在を知ったのは「こきりこ節」を邦楽、洋楽、日本の民謡のコラボレーションの曲として表現するにあたって、実際に五箇山をたずねてみて、調べて、初めて知り、奏法を現地で学んだ。「こきりこ節」は小学校、中学校、高校と音楽の教科書にとりあげられている。こきりこ竹は打楽器として、音を出すときの手のひらの竹の握り方、返しと、2本の竹を打ちながら歌うのにコツがあり、できると満足していた。この指導は、単独の講座ではなく、民謡講座、楽器演奏講座、学校の授業の中で、手軽に短時間でできる。

第3節 ミュージカルの公演を目指して (資料2参照)

平成18年度は前期も後期もミュージカル「竹取物語」に取り組んだ。参加者は前期は男子が7人いたが、後期はスポーツクラブの大会が時期的に多く全員女子になってしまった。それぞれ、オーディションにより配役は決定した。一人一役が理想であるが、50名あまりの子どもに役を割り振るのは難しく、より多くの子どもに光を当てるために、1幕、2幕で一役を分けたこともあった。「竹取物語」の場合、大勢の武士の役は、それぞれせりふや動きに見せ場があり、男子は鎧をつけ弓を持ち生き生きしていた。後期は武

士の大將、家来とも女子が演じたが、小学校の高学年の女子は男子に勝るとも劣らぬ迫力で舞台表現ができた。また天女もしなやかな踊りや三部合唱と大勢でもやりがいがあり、この曲の構成は50名あまりの子どもに適していた。日本最古の物語文学である「竹取物語」のミュージカルは全2幕約30分のミュージカルであった。そこで今回のミュージカル講座では気分転換、洋楽のミュージカルの体験もかねて、違うミュージカルから3曲チャレンジしてみた。

(1)ミュージカル「キャッツ」より スキンブルシャックス(鉄道猫)

幼児から高校生まで、それぞれが自分になりたい猫の衣装を考え、猫のしぐさを研究しラインダンスをし、シッポを持って踊り、がらくたで電車を作り楽しそうに全身を使って表現していた。

(2)ミュージカル「アニー」よりハードノックライフ

毎年4月から5月にかけて青山の子どもの城で公演されているミュージカルで、日本全国からこのミュージカルを目指す子どもが集まる子どもに人気のミュージカルである。世界恐慌のアメリカにおける孤児院が舞台で雑巾片手に、つらい境遇にも負けずパワフルに歌って踊るこの曲は子どもたちが生き生き舞台で輝いていた。

(3)ミュージカル「コーラスライン」よりワン

黒のシルクハットを片手に高度なステップ身のこなしと大人っぽい雰囲気曲であった。小学校5年生以上のオーディション合格者による公演となったが、周りで練習を見ている子どもたちも次は自分がやりたいと積極的に練習には参加していた。

第4節 音楽をする楽しみ喜びを求めて

「音楽は喜びを十倍に、悲しみを二分の一にしてくれる親友」と故羽田健太郎さんが言っておられたように、音楽活動に参加することで、音楽から得る喜びは今まで経験したことのない大きな喜びになり、音楽に慰められる経験もするだろう。子どもが育った文化や環境から自然に生まれた音楽こそ本当の意味での音楽的、人間的成長を促す力をもっている。歌詞のついている音楽は子どもの言語能力と表現力を伸ばし、同時に社会性をバランスよく考える。^{注6)}

個々に歌い、楽器を演奏する喜びから、音楽活動を通して、アンサンブル(合唱、合奏)する喜びに出会ったとき、喜びや楽しみが何倍にも広がる。心に残る音楽活動との出会いこそ、自分を輝かせる音楽との出会いである。

第5章 平塚から発信と交流

第1節 邦楽・洋楽・民族音楽で綴る「竹」物語 (資料3参照)

音楽を通して人々の心を豊かにする「国際音楽の日」は世界各地で「音楽でつなぐ心の輪」をモットーに記念事業が行われている。地域の人々が様々な音楽的表現を通して暮らしの中に活かす音楽のすばらしさを認識する機会を作る。民族、国、分野など様々な枠を超えた上での人々の連帯、友情、協調や音楽を通じて表現することによって違いを認め合いながら、伝統の中に普遍的な音楽を創造する。そのような理想を夢見ながら、「竹」創造のまち平塚実行委員会が組織された。平塚市では毎年7月「七夕まつり」を開催し、文化的な行事として竹飾り制作、音楽、舞踊、芸能など5日間イベントを企画し運営している。

私と竹との関わりは平成17年度文部科学省「子どもの居場所」の事業で、七夕飾りに使用された竹を再利用し、竹楽器(アングルン・バンブーゴング)を市内の子ども達と作ったことから始まった。次に竹楽器アングルンのコンサートを企画し、アングルンの魅力を平塚で紹介する機会を作った。そして今年文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業として、国際音楽の日記念シンポジウムコンサート“竹”物語を企画運営することとなった。シンポジウムコンサートは10月1日平塚市民センター(1400名収容)で行われ、1000名を越す参加者のもと無事終了した。コンサートは嶋崎譲理事長(財団法人音楽文化創造)の「国際音楽の日によせて」の講話で始まり、邦楽・洋楽・民族音楽といった様々な分野の違いを認め合いながら、伝統の中に普遍的な音楽を創造していくことが、21世紀の課題であり、こういう活動が平塚市に根付くことの意義を説いてくださった。主催者の意図しているものを聴衆に的確に伝え、その理解のもと演奏会が行われた。以下プログラム順に概要をのべる。

(1) 芭蕉布(箏・尺八・女声三部合唱)

昨年の「国際音楽の日記念フェスティバル」が沖縄で開催されたことから、平塚での一曲目は「芭蕉布」を選曲した。広瀬宣行(指揮)、13弦と17弦の箏12面と尺八そして女声三部合唱(15名)で演奏された。沖縄の音楽は、生活との結び付きが強い民族音楽から、首里王朝時代に発展した古典芸術音楽に至るまで、一貫して共通した音楽的基盤を持っている。音階、リズム、音色、音域など独特の特長を持っている。この沖縄の音楽と邦楽(箏・尺八)そして洋楽(ベルカントの発声による合唱)のコラボレーションで演奏した。箏の奏者の八割が指揮を見て演奏する初体験となり、今後の新たな演奏スタイル、音楽の創作の第一歩となった。

(2) アングルンのための組曲「かぐや姫」(アングルン・ピアノ)

アングルンは熱帯で育まれた竹の楽器であり、その奏でる音はまさしく澄みき

った生命の音で、大森林に囲まれたような心地になるといわれているインドネシアの民族楽器である。この楽器は、農民の鳥追いのために作ったのが始まりで、数十年前までは五音階の楽器だった。インダ・プトゥリ(作曲・演奏)は新谷たか枝さんをリーダーとする音楽大学でピアノを学んだ3名の女性で構成されている。彼女達がすべて竹で作られている(釘1本、留め金1つ、人工の物を使わない)この楽器に出会い、民族(民俗)楽器として位置づけられているアングルンを『アベマリア』『G線上のアリア』から交響曲に至るまでの西洋のクラシック、『九十九里浜』などの日本歌曲など幅広い演奏表現できるインターナショナルな楽器にしようとなつた奏法、音楽を追求し続けている。今回もこのコンサートのために、アングルンのための組曲「かぐや姫」を創作し、アングルンを一音一音手で震わし、竹の音のうねりの中に、観客に祈り、安らぎ何らかの力を手渡ししてくれた。自然と音楽と人間とのすばらしいコラボレーションであった。

(3) ミュージカル「竹取物語」(児童合唱・箏・管楽器・ピアノ)

このミュージカルは公募によって集まった53名の青少年が約3ヶ月、20回の練習で本番に臨んだ。学校の週休2日制に伴い子ども達が課外活動や地域の文化活動にどのように関わっているかという、共働きの家庭が多く、有料でお稽古事と同じ位置づけの文化活動に参加できるのは限られた子どもになっている。市内の青少年の合唱団は年々団員が減少し10名前後の編成になり、市内の「合唱祭」、「第九のつどい」など音楽文化的行事への参加の伸び悩み、高齢化が進み、平塚では青少年の音楽活動は難しいのかと思われた。ところが今回文化庁の支援事業であり、平塚市文化財団の共催事業として低額の参加費、専門の指導者、夏季休業という参加し易い環境や条件のもと平塚市文化財団の学校、公共施設への働きかけ、的確な運営に対する支援やアドバイスが53名の子ども達の貴重な音楽活動体験を可能にした。小学生から高校生までの幅の広い年齢層でありそれを一堂にまとめて指導をするために、発声、歌唱、基本動作、振付と専門の指導者、補助指導員、現場準備指導員の連携プレイにより効率の良い運営をした。音楽面では箏(十三弦、十七弦)ピアノ、フルート、ホルン、トロンボーン、付板によるアンサンブルの伴奏に同声三部の合唱、ソロの歌で構成された。序曲は今回のためのオリジナル作品であった。洋楽、邦楽それぞれの楽器が自己紹介するかのようにメロディーを交互に奏でこれから始まる合唱をやさしく迎えるかのような日本的で心温まる曲であった。序曲以外はこの楽器編成に合わせて編曲してもらい、編曲者参加指導のもと本番を迎えた。若手の声楽家であり、演出、指揮、指導に当たった倉藤理大先生の演出は会場と舞台を一体化させ、出演者の可能性を最大限発揮させた。子ども達が舞台の上で、目を輝かせて演じている姿はプロの演奏家でもかなわない感動を与

えた。ここまで関わってきた指導者、小道具制作者、衣装制作者、舞台スタッフの皆さんの苦労も、でき上がった演奏で報われた。子ども達のパワフルな舞台表現に驚いたり、創造する喜びやすばらしさも体験できた。また竹工芸サークル「竹遊会」の永田さんを中心とするメンバーが小道具の竹籠制作や、舞台両袖の竹林、竹垣の素晴らしいオブジェの制作協力をしてくださり、音楽、美術のコラボレーションもできた。

(4) オペラ「なよ竹の輝夜」より (子どもの合唱、ソプラノのアリア)

作曲家中田直宏先生のご好意により管楽器(フルート、ホルン)ピアノ、エレクトーンによる新たなオペラ表現が実現した。声楽家であり、オペラのプリマドンナとして活躍中の岩崎由紀子先生に出演していただいた。オーケストラでの演奏では慣れておられる先生もエレクトーンとは初めての試みで、合わせの時間が取れない中多大な協力をしてくださった。電子楽器の高い演奏技術を持った奏者の音楽表現はオーケストラに負けず高い水準だった。しかし電子楽器は演奏者と音にスピーカーを通すこともあり、微妙なずれがあり、繊細な表現に対応するためにはそのための準備や計算が必要とされる。機械と人間の感情や感覚とがどのように向き合っていくかが、今後の課題である。

(5) ふるさとの詩(故郷、こきりこの唄、浜千鳥、冬景色)

箏、尺八、ホルン、フルート、コキリコ竹、コキリコささら、合唱で演奏した。日本の民族音楽である「こきりこ」をコキリコ竹やコキリコささらを打楽器として加え、富山県の五箇山で実際に踊られているコキリコ竹を持った踊りも子ども達によって再現した。最後に会場中の人達とアンクルンも加わり「故郷」を演奏した。全員参加のコラボレーションで終演となった。今回は国際音楽の日に「竹」をテーマに多種多様なコラボレーションにより新たな文化創造の一步を踏み出すことができた。

第2節 邦楽・洋楽・民族音楽で綴る「竹」物語 (資料4参照)

平成19年10月7日(日) 平塚市中央公民館大ホール(定員701名)15:00 開演
予定

部・・・バンブーオーケストラ演奏

バンブーオーケストラはその土地の育んできた自然、生態系の生み出す天然の恵み「竹」をテーマに、竹を通して響きだす音や、そこから紡ぎ出されてくる旋律を、地域の人々と共に探し、拾い集め、磨き上げ、おあらかで自由な音楽世界に解き放ち、その喜びを多くの人々と共に分かち合うことを目指す。前日(6日)竹を切り楽器制作を行い、その手作りの楽器で子どもたちが演奏に参加する。

部・・・創作ミュージカル「七夕」

平塚市民の脚本制作、作曲は若手作曲家に依頼、そして出演は一般公募の平塚市内の小学生50名による、今回のためのオリジナル作品の公演を予定。

部・・・邦楽、洋楽、民族音楽(内モンゴル民族音楽)のコラボレーション演奏

(資料5,6参照)

平成19年度は内モンゴル出身古箏奏者ウリアナさんを中心とした、モンゴル舞踊団の6名のメンバーによるモンゴルの民族音楽の演奏や平塚の子どもたちとの文化交流も予定されている。そのほか世界各地の音楽の特徴をとらえ、歌い、踊り、民族性、文化を味わいながら音楽で世界を結ぶ音楽活動を予定している。

第3節 音楽は世界の共通語

邦楽・洋楽・民族音楽の音楽活動を通して、日本の伝統音楽にふれ、改めて身近にありながら別世界のような概念で、聞き過ごしていた尺八、箏の音楽に日本の伝統音楽のすばらしさを実感した。また今まで、洋楽の音楽活動をしてきた者にとっては他の音楽とコラボレーションすることで、洋楽の今まで見えなかった特長や音楽性を感じさらに深く追求する意欲につながった。民族音楽に関してはやはり現地の演奏者とのつながりがあってこそ、民族音楽の精神を伝えることができる。民族音楽はその民族の風土、歴史、人間性を音楽を通して伝え、それを受ける側と音楽で交流する世界の共通語のようなものである。今回、インドネシア、内モンゴルと音楽を通して関わることになり、今まで遠い国のような存在だった2つの国が音楽を通すと、身近で、親しみのある国になってしまった。音楽は、過去の戦争の歴史や現在の国際情勢による他国との先入観や感情を忘れさせ、人類愛を育てる魔法のような存在に思った。

おわりに

私と子どもとの、音楽の関わりは、音大在学中に平塚市内の公民館で小学生に合唱を教えたことから始まり、公立中学の音楽教師となって、授業や合唱部で中学生と音楽で向き合った。しかし常勤の教師となると、進路指導、いじめ、不登校など音楽以外での子どもとの関わりが多く、自分の目指す音楽からだんだん遠のくように思った。そこで高校の音楽の非常勤講師をしながら、公民館など公立の施設や社会福祉法人の施設などで、音楽指導をする道を選び、国の助成事業を企画運営することとなった。

音楽がいいものであることはわかっていたが、音楽にさまざまな角度から向き合ってみると、音楽は、自己表現、楽しみ、喜び、鍛錬、他の人とのコミュニケーションといった要素を持ち、改めて音楽のすばらしさを実感した。今の子どもたちの成長に必要不可欠であり、現代の大人の人として欠けている部分を補えるのは音楽しかないと思った。自分の体を楽器とした歌う活動(合唱、ミュージカル)、楽器を制作する(音を作り出す)活動、楽器を演奏する活動(竹楽器)など様々な音楽活動を企画運営し、子どもたちに自己表現の場を与えていきたい。音楽は、子どもたちの心を育て、自信を深め、自我意識を強める。子どもたちが音楽活動に積極的に参加し、連帯感や感動を味わっている姿に子どもの輝きを見ることが出来るだろう。子どもの輝きを求めてベストを尽くしてこの事業に取り組みたい。そのためにも私自身、音楽の道での自己研鑽に励み、音楽への情熱を持ち続けたい。そしてこのような事業を運営するに当たり、応援協力してくれる仲間や関係者へ感謝の気持ちを持って共に歩んでいきたい。

注1) 紀声会 …… 国立音楽大学教授岩崎由紀子先生の門下生の会

注2) 鈴木鎮一 …… 「愛に生きる」才能は生まれつきではない p157

注3) 高萩保治・中島恒雄 …… 「音楽の生涯学習」 p42

注4) 鈴木鎮一 …… 「愛に生きる」 p170

注5) 高萩保治・中島恒雄 …… 「音楽の生涯学習」 p123

注6) フィリップシェパード …… 「音楽の魔法」 p40